

陸奥國  
石卷港

〔奥羽觀蹟聞老志〕<sup>九</sup>石卷海門。

斯地也。市店連屋、漁家比隣、商賈群集、農工雜居、繁華輻輳、殆若江都海濱、商舶之出入、漁艇之來往、日夜泛々、朝夕囂々、賣買不乏、交易不虛、生財之有便、貨殖之有利、迺與攝州大坂、越前敦賀、筑紫博多、出羽酒田、同膏腴、土產豐饒之富、天下第一之津也。

〔東遊雜記〕<sup>二十</sup>石の卷は奥州第一の津湊にて、南部仙臺の産物此地へ出て、江戸に積、大坂へ廻る、故に諸國よりの入船數多にて、繁昌のみとなり、案内のものより申上しは、市中千四十七軒、寺院十八ヶ寺、社十壹といひし事ながら、湊村蛸田村といふ所にては、予がつもるところ三千軒餘もあるべし、娼家も數家見へて、人物言語も大がいよき所なり。

〔日本書紀〕<sup>仁德</sup>五十五年、蝦夷叛之、遣田道令擊、則爲蝦夷所敗、以死于伊寺水門。

○按ズルニ、伊寺水門ハ、即チ石卷港ナルベシ。

出羽國  
酒田港

〔東遊雜記〕<sup>八</sup>廿八日天明八年六月大山村出立五里廿四丁酒田の浦に止宿、此所羽州第一の津湊、市中三千餘軒商家にて、人物言語大概にて、諸色乏しからず、九州中國及び大坂より廻船交易の爲に往來して、此津に泊して國中の産物を積事也、大船は宮の浦の川口に寄せ、酒田までやうく三百石積の船ならでは入らず、酒田より川口まで三十五丁有、鶴が岡直道僅に七里。

野代港

〔東遊雜記〕<sup>十</sup>野代といふ所は、湊にて千四百軒の地にて、大概のよき町なり、野代川流れ、川上は奥州南部より流れ出て、十九里の間は川舟往來して、此邊の産物皆々此湊に出て、北國九州および大坂の廻船も數多入津して、交易の業あるゆへに、商人多く豪家に見へ、娼家もありて、言語も外より見れば大ひに勝れたり、羽州の内にては最上川第一にて、第二は此所を流る、野代川なり、〔續諸州めぐり〕<sup>六</sup>敦賀 北海の邊に有町也、奥州、出羽、山陰道、すべて日本の北の海邊にある諸國より船のつく湊なり、中について秋田、坂田、津輕、高田などの舟多し、故に民家多く、富る商人おほ

越前國  
敦賀港